愛知工業大学研究報告
第 47 号　平成 24 年

現代中国語における移動動詞に関する認知的考察
―構文文法の観点から―

A Cognitive Study of Motion Verbs in Modern Chinese: From the Viewpoint of Construction Grammar

韓涛 †
Han Tao

Abstract　Chinese motion verbs can be divided into two subtypes, (1) the directional motion verbs, (2) the manner motion verbs, depending on whether it is possible to abstract the semantic feature of directionality from the verb or not (Maruo 2005). This analysis is effective to explain why some linguistic expressions consisting of motion verb and noun (particularly loction noun) are grammatical, such as “在公园里跑”“去公园”; some are not, such as “*在公园里去”“*跑公园” . However, it is difficult to explain some of the linguistic phenomena, such as “飞日本”“去一封信”“跑车站” and so on. In order to make a comprehensive description of these linguistic phenomena, this paper studies Chinese motion verbs from the viewpoint of Construction Grammar.

１．はじめに

現代中国語の移動動詞は、「方向性」という意味特徴の有無によって、“跑”［走る］[1]、“飞”［飛ぶ］などに代表される「様態移動動詞」（以下、V_m と略す）と“去”［行く］、“进”［入る］などに代表される「方向移動動詞」（以下、V_d と略す）に下位分類できる（丸尾 2005 参照）。そしてこの種の分類は、移動動詞が生起可能な統語環境を規定するにも有効的であると思われる。たとえば、“在＋L”との共起関係について、例（1）のように、V_d では成立しないが（*は非文を表す）、V_m は成立する[2]。

（1）a. *在公园里去
　　b. 在公园里跑
　　［公園で走る］

しかし、その一方で、例（2）で示されている通り、「公園」を動詞の後ろに置くと、今度は、逆に V_d が成立するのに対し、V_m は不成立となる。

（2）a. 去公园
　　b. *跑公园

その理由として、V_d は［＋方向性］であるため、直接場所目的語をとることができるのに対し、V_m は［－方向性］であるがゆえに、場所目的語をとるためには、“跑<u>到</u>公园”［公園まで走る］、“跑<u>向</u>公园”［公園へ走る］のように、ほかになんらかの補語成分を必要とすることが挙げられる。しかしその一方で、この制約に違反するような例もみられる。

（3）a. 上树
　　［木に登る］
　　a’. 上到树上
　　［木に登る］
　　b. 飞到日本
　　［日本に飛ぶ］
　　b’. 飞日本
　　［飛行機で日本に行く］

例（3a）と（3b）における動詞の意味とそれが生起する統語フレームは一致しているのに対し、（3a’）と（3b’）は、その両者にある種のズレが生じている。すなわち、（3a’）の“上”は直接場所名詞をとれるにもかかわらず、場所目的語との間に別の成分“到”が介在している。一

†　愛知工業大学　基礎教育センター（豊田市）

方、(3b’) の“飞”は、[－方向性] で、場所名詞と直接生起できないはずであるが、着点を表す場所目的語を直接とっているというゆらぎ現象を指摘できる[3]。

さらに、例 (4) のように、移動動詞は、場所名詞のほかに、一般の名詞と生起することも可能である。しかし、なぜこれらの用法が成立するのか、その要因は、移動動詞の性質（つまり、「方向性」の有無）のみからは得られない。

(4) a. 去一封信
［手紙を一通送る］
b. 跑车
［（タクシー運転手が）車を走らせる］

これらの言語現象は、動詞の意味情報と統語情報から文の統語形式を予測しようとする従来の語彙意味論の主張には根本的に限界があることを示唆している[4]。従って、これらの問題を解決するために、新たな言語理論を援用する必要がある。本稿では、Goldberg1995、1999 の「構文文法」(Construction Grammar) という理論的枠組みを導入しつつ、「構文」的アプローチによる問題解決を試みる。

２．構文文法の考え方

構文文法の考え方では、文はボトムアップ的に語彙項目から合成性原理に基づいて構成されるものとしてではなく、それ自体が形式と意味からなる言語ユニットとして個々の構成要素に還元できない一つのゲシュタルトであると見なされている (Goldberg1995、中村 2004 など参照)。たとえば、英語における使役移動構文は表 1 のように規定される。

Caused-motion	Meaning	Form
	X causes Y to move Z	Subj V Obj Obl

表 1 (Goldberg1999:199 体裁は引用者による)

では、一つ具体事例を考えてみる。

(5) Pat sneezed the foam off the cappuccino.
(Goldberg1995)

例 (5) は、「Pat がくしゃみをして、それが原因で、カプチーノの泡が吹き飛ばされた」という場面を表しており、使役移動構文が用いられている。ここで注意すべきは、構文の成立可否は文の主要部である sneeze の意味情報と統語情報（一項の自動詞）から独立していることである。ただし、動詞のもつこの種の語彙情報は完全に排除されているわけではない。ここでは、sneeze の語彙情報を参与者役割 (participant roles)、すなわち、“SNEEZE<sneezer>”のように規定することができる (Goldberg1995 参照)。しかし、ここで注目すべきは、sneeze には一つの参与者しかプロファイルされていないにもかかわらず、この構文と生起することができるということである。たとえば、sneeze を同じ一項動詞 look に置き換えると、非文となる。

(6) *Pat looked the foam off the cappuccino.

われわれの常識に照らし合わせるとき、通常 sneeze はカプチーノの泡が吹き飛ばされた原因として解釈されうるが、look 自体が「モノを移動」させる（つまり、一種のエネルギーである）とはふつう考えられない。さらに Goldberg1995 によると、sneeze は図 1 の形で使役移動構文に融合されるとされている。

Composite Structure: Caused-Motion + sneeze:

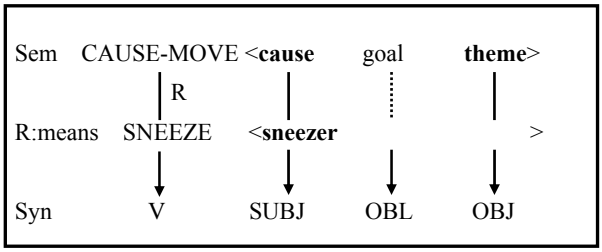

図 1 (出典： Goldberg1995:54)

この図 1 からは次の二点を指摘することができる。まず、いわゆる使役移動構文には、意味的には三つの項構造 (cause、goal、theme) が要求される。しかし、goal という項構造 (argument role) は、ほかの二つの項構造と異なり、直接プロファイルされていない。なぜならば、例 (5) にも示されているように、この goal 項は前置詞 off と直接リンクしているからである。そして、CAUSE-MOVE を実現するために、SNEEZE は一種の手段 (means) として認められる。また、sneeze は一項動詞であるため、goal 項と theme 項が空位となっているが、シンタクスのレベルにおいては、この空位が構文によって自動的に補われる。

この種の構文文法の考え方は中国語の言語現象の説明に対しても有効である。たとえば、“死”［死ぬ］という動詞は一項動詞で、その参与者役割を、“死〈死者〉”のように表記することができる。そしてこの参与者役割からは、“她的父亲死了”［彼女の父親が死んだ］のような自動詞構文が予測できる。しかし一方で、“她死了父亲”［彼女は父親に死なれた］のように「損失・被害」を表す際に、“死”は二つの名詞成分―〈受損者、損失物〉と生起しうる[5]。

ここでの問題は、〈損失物〉に相当する“父亲”を“死”

の目的語と見なすべきかどうかということである。構文主義の観点に立てば、“父亲”を“死”の目的語として処理するというよりは、構文自体がもたらした項構造であると考えた方が包括的な説明がつく。その理由としては、もし“她死了父亲”のような生起環境を基準に、“死”を二項の動詞として処理してしまうと、“死”は一項の動詞であると同時に、二項の動詞でもあるということになり、大きな矛盾を抱えることになる[6]。また、その一方、なぜ“她养的花儿死了”［彼女が育てた花が死んだ］は成立するが、“*她死了花儿”は不成立となるのかというような言語現象も説明することができない。

しかし、「構文はわれわれが意味づけた外部世界の場面に直接対応する」という構文文法の立場をとれば、認知主体である話者が、社会の常識に準じて「父親の死は彼女に大きな損失を与えた」というスタンスでこの出来事を解釈している以上、“她死了父亲”という統語形式を用いることがごく自然なことである。そこで「父親の死」は「損失」の原因と解釈され、この構文に融合されたと考えられる[7]。

なお、本稿は、動詞“死”のこの種の用法を、動詞の参与者役割に基づく用法と区別し、構文に基づく用法と見なすことにする[8]。次節では、この構文的アプローチによる移動動詞の「構文に基づく用法」について考察する。

３．構文に基づく移動動詞の用法

３・１　自動移動構文の用法

人や物の位置変化を含んだ「移動事象」は、われわれの日常生活の中でよく見られるものである。そしてこの種の場面が概念化のプロセスを経て、言語化されたものが移動表現である。そして、「鳥が空を飛ぶ」のように移動物が自らのエネルギーで移動する場合と、「ボールを空に投げる」のように外部のエネルギーで移動物が移動する場合を考えるとき、前者はいわゆる「自動移動構文」、後者はいわゆる「使役移動構文」とされる。以下では、まず「自動移動構文」について考えてみる。

自動詞移動構文のスキーマは、一般に（7）のように定義することができる。

（7）X MOVES TO Y　→　具体例 : The fly buzzed into the room.

（cf.Goldberg1999）

まずこの定義によれば、自動移動構文は、二つの項構造―「移動物」（X）と「場所」（Y）が必須であることが分かる。また、例（7）を見る限り、英語は Talmy 1985 で分類されている Manner Language の特徴とも一致している。つまり、「移動様態（Manner）」（=buzz）と「移動（Motion）」が合成され、文の主要動詞（中核部）として具現化されていている一方、「移動経路（Path）」（= into）は別の付随要素（非中核部）で表される。

そしてこのような「移動事象」の捉え方は、中国語にも当てはまる。たとえば、例（7）を中国語に直訳すれば、“有只苍蝇嗡地飞进了屋子”となるが、ここでも、やはり「移動経路」（=“进”）がなんらかの補語成分によって表されている。この点においては、中国語と英語がかなり類似しているといえる。しかし、両者には違いもある。前述したように、中国語では、“进”“出”“来”などの移動動詞は直接場所目的語をとることができ、場合によって文の中核部を担うことも可能である。一方、英語の前置詞は、場所を表す名詞成分と生起することが可能であるが、その際、単独で文の中核部になることはできない。

以上のことから、中国語の自動移動構文には二種類のスキーマが存在すると考えられる。

（8）中国語の自動移動構文のスキーマ：

a. Meaning: X MOVES TO Y
Form: S + V_m+ Comp　（補語）+ OBL（場所目的語）
→　具体例：走进教室［歩いて教室に入る］

b. Meaning: X MOVES Y
Form: S + V_d + OBL
→　具体例：进教室［教室に入る］

そして、V_m と V_d の参与者役割をそれぞれ「V_m〈移動物〉」と「V_d〈移動物、場所〉」と表記すれば、（8）の（a）と（b）はそれぞれ動詞の参与者役割と一致していることが分かる。これは、一見してどの性質の移動動詞がどのタイプの移動構文と生起するかが予測できるように見える。しかし、この種の予測はすべての言語事実によって支持されるわけではない。

まず、V_m の場合を見てみる。

（9）小李这个月要飞日本。
［李さんは今月日本に飛ぶつもりだ］

（10）跑车站很挣钱。
［（タクシーは）駅でお客を乗せるのが（他の所より）儲かる］

例（9）の“飞”は、実際、（8a）タイプではなく、（8b）タイプの移動構文と生起している。しかも、このとき、“飞”の後に直接場所名詞―“日本”を伴っており、V_m のもつ参与者役割との間にある種のズレが生じている。また、文全体として、「移動物」を表す「李さん」が目的地である「日本」に移動するという“位移”の意味も含意されているが、これは文の構成要素から導き出すことはできない。同様に、例（10）の“跑”も直接場所名詞

をとっており、V_m 固有の性質（(8a）参照）と異なるタイプの構文と生起している。

このとき、通常のタイプの構文ではなく、(8b）タイプの移動構文と生起するときに、1）V_m が許容される制約は何であるか、そして 2）二つの構文の間に、どのような意味（もしくは語用論）的な差異があるのかという二つの問題点が生じる。

まず、1）に関しては、もちろんすべての V_m は（8b）タイプの構文と生起できるわけではない。たとえば、同じ V_m であっても、例（9）の“飞”を“走”に置き換えることはできない（→“*小李这个月要走日本”）。なぜならば、ここの“飞”は、文字通りに「移動物」が自らのエネルギーで「飛ぶ」のではなく、「飛行機」という乗り物を使って移動するという「移動手段」を表していているからである。さらに言えば、この用法の背後に、「スピーディな長距離移動は、飛行機が適している」という百科事典的知識も関与しているといえる。そして、“飞到日本”のような（8a）タイプの構文と“飞日本”のような（8b）タイプの構文の間にもある種の語用論的な差異が認められる。たとえば、(8a）は、V_m が通常生起するタイプの移動構文であり、“飞”は、単なる（「移動物」の)「移動様態」を表しているに過ぎない。そのため、(8b）のような「飛行機で移動する」という移動手段が含まれていないということが挙げられる（例：“棒球飞到了场外”［(野球の）ボールが場外まで飛んだ]）[9]。同様に、この種の解釈は、例 (10) においても成立する。つまり、ここでいう“跑车站”の背後に、“开出租车到车站拉人”［タクシーで駅に行って客を拾う］という語用論的な含意が含まれており、“??走车站”と“跑到车站”［駅まで走る］と等価するものではない。

次は、V_d の場合を考えてみる。

（11）a. 上树
［木を登る］
b. 上到树上
［木に登る］

（12）a. 回家
［帰宅する］
b. 回到家
［家に帰る］

例（11)、(12）の“上”と“回”は、V_d と見なすことができる。しかしながら、V_d の参与者役割からは、例 (11b)、(12b) のような用法を予測することができない。ここで注意すべきは、例（11a）と（11b)、そして例（12a）と（12b) は、必ずしも同一事態を描写しているとは限らないことである [10]。たとえば、例（11b）と（12b）は、例（11a）と（12a）に比べ、完了的（imperfective）であり、より具体的な事態を表すことができる。たとえば、“你上到树上干什么,快下来”［木に登ったりして何してるの。早く下りてきて]、或いは“那猴子一眨眼的工夫,就从地面上到了树上”［あのサルはあっという間に地面から木に登った］は、いずれも変化を表していて、有界的（bounded）である。これに対して、“上树”は“猴子会上树”［サルは木を登れる］のように一つのゲシュタルトとして、非完了的なスキーマ的な事態を表す [11]。同じように“回家”の場合も、“回到家”の上位スキーマに相当し、「帰宅する」或いはより抽象的な意味の「帰省する」を表せるのに対し、“回到家”の場合における“家”は移動の「着点」(goal）としてプロファイルされている（例：“昨晚刮台风，我好不容易才回到家”［昨夜台風で、私は辛うじて家に帰り着いた])。

以上、V_m と V_d が場所名詞と生起する際の統語形式は以下のようにまとめることができる。

（13）V_m の場合：

a. $S + V_m + Comp + OBL$ （動詞の参与者役割に基づく用法）

b. $S + V_m + OBL$ （構文に基づく用法）

V_d の場合：

c. $S + V_d + OBL$ （動詞の参与者役割に基づく用法）

d. $S + V_d + Comp + OBL$ （構文に基づく用法）

(13) に示しているように、V_m と V_d はともに、動詞の参与者に基づく用法（いわゆる通常の用法）以外に、構文に基づく用法も有する。それを可能にするのは、語用論的強化或いは認知主体の捉え方といった認知的要因が考えられる。また、$S + V_m + OBL$ と $S + V_d + OBL$ は、$S + V_m + Comp + OBL$ と $S + V_d + Comp + OBL$ に比べ、動詞と目的語の距離が短く、よりスキーマ的な関係を表すことができ、場合によって、慣用化されることもある（移動動詞のイディオム化については、3.3 節で考察する)。

３・２　使役移動構文の用法

移動動詞は、前節で見た場所名詞以外に、一般の名詞と生起することも可能である。

（14）a. 他在给机器上油。
［彼は機械に油を加えているところだ］
b. 他跑车去了。
［彼は車を走らせに行った］

本節では、まず使役移動構文のスキーマと中国語における使役移動概念を表すことが可能な統語形式を検討し、その上で、(14) のような用法が使役移動構文の用法であることを認定する。そして、なぜ移動動詞が使役移動構文と生起しうるのか、その動機付けについて考察する。

2 節の表 1 で示している通り、使役移動構文のスキー

マは、以下のように表示できる。

（15）X CAUESE Y TO MOVE Z（（表 2）再掲）

このスキーマは、ある「移動物」（Y）が、「動作主」（X）の働きかけによって、終点を表す「場所」（Z）に移動するという場面を表しているため、対応する統語形式は、三つの名詞性成分―「動作主」、「移動物」、「場所」を伴うことが要求される。そして、このスキーマに基づいて、中国語の使役移動構文は、以下の四種類の統語形式によって表示されうる。

（16）a. 递系句
→例：他喊我进屋
［彼は私を部屋に入るよう呼んだ］
b. 动结句
→例：他搬进来一台电脑
［彼は一台のパソコンを運んできた］
c.“把”字句
→例：他把书装进了书包
［彼は本をカバンに詰め込んだ］
d.“被”字句
→例：帽子被风刮到了地上
［帽子が風で地面に吹き飛ばされた］

例（16a）～（16d）は、いずれも「移動物が動作主の働きかけによって別の場所に移動する」という移動使役の場面と対応している。ただし例（16b）では、「場所」を表す項構造が、“来”によって暗示され、背景化されている。そして、それぞれの統語機能と意味機能は、以下のように異なっている。

まず（16a）の“递系句”は「移動物」が人間のような有情物でなければならないという制約がある。このタイプの使役移動構文は、「動作主」が「移動物」の移動に対してなんらかの働きかけはするものの、「移動の結果達成」が含意されていないため、「移動物」による「移動の拒否」が可能である（例：“他喊我进屋，但我就是不进屋”［部屋に入るようと彼は私を呼んだが、私は入らない］）。「移動の結果達成」を含意しないという意味で、このタイプの構文は、非典型的な使役移動構文といえる。

次に、（16b）の“动结句”は、一種の客観的な陳述であるのに対し、（16c）の“把”構文は、認知主体である話者の主観的立場が含まれているため、両者にはある種の語用論的差異が見て取れる。たとえば、

（17）a. 他放进去了一勺盐。
［彼はひと匙の塩を入れた］
b. 他把一勺盐放进去了。
［彼はひと匙の塩を入れてしまった］

例（17a）は、ただ客観的に起こっている出来事をリポートしているだけであるのに対し、（17b）は、場合によって、本来塩を入れるべきではないところに、動作主が誤って塩を入れてしまったという意味合いさえ読み取ることができる。これは、“处置式”と呼ばれる“把”構文のもつ基本的な意味機能と合致している（沈家煊 2002 参照）[12]。その意味では、（16d）の“被”構文も話者の視点が含まれていると考えられる。ただし、両者は、視点の置かれ方が異なる[13]。次の例文を見てみる。

（18）a. 他把皮球踢到了房上
［彼はボールを屋上に蹴っ飛ばした］
b. 皮球被他踢到了房上
［ボールは彼に屋上に蹴っ飛ばされた］

例（18a）は、「ボールが屋上に蹴っ飛ばされた」原因が動作主のところにあるという意味で、話者の視点は「彼」にあるといえる。一方、（18b）は、話者の視点が「彼」から、「ボール」に移動している。

以上のことを踏まえ、使役移動構文の認定基準を次のようにまとめることができる。

1） 当該構文を“致使事件”と“位移事件”に分けることができる。
2） 統語的に、“致使事件”と“位移事件”の間を“使”で結ぶことができる。
3） “把”構文（ないしは“被”構文）と書き換えが可能である。
4） 動作主の発したエネルギーが、移動物に伝わり、移動物を移動させる。

1）～3）は形式上の制約であるのに対し、4）は意味上の制約である。たとえば、（16a）の“递系句”を例にとってみると、“他喊我进屋”を“致使事件”（“他喊我”）と“位移事件”（“我进屋”）の二つの出来事に分けることができ、そして前件が後件を引き起こす原因として、両者は“使”で結ぶことができる（例：“他喊我，从而使我进屋”）。さらに、この種の“递系句”を“把”構文（ないしは“被”構文）に書き換えることも可能である（例:“他把我喊进屋”、“我被他喊进屋”）。一方、文全体は、「彼が私に働きかけ、私の位置変化を引き起こす」という意味を表しているため、4）の意味上の制約もクリアしている。従って、“递系句”を使役移動構文の一種に位置づけることができる。

以下、この基準を使って（14a）と（14b）を検証してみる。（14a）の“他在给机器上油”は、“他作用于油”［彼は油に働きかける］（“致使事件”）と“油上到机器里”［油は機械に移動する］（“位移事件”）という二つ出来事によって構成され、かつ二つの出来事が“他作用于油，从而使油上到机器里”のように使役関係にある。また、“他把油上到了机器里”のように“把”構文と書き換えることも可能である。そして意味的には、動作主

の働きで、移動物である「油」が、移動先の「機械」に移動するという場面にも対応している。

しかしここでの問題は、(16)の各タイプの構文と違い、（14a）の“致使事件”には「駆動力」が明示的に示されていないことである。この問題を解決するために、《結果によって、原因を捉える》というメトニミーの概念を援用しなければならない。つまり、“油上到机器里”という後件と“他作用于油”という前件が時間上の隣接関係にあるため、認知主体が語用論的推論に基づいて後件で前件を捉えることが可能である。さらに、たとえば、“端正态度”［態度を正す］、“方便群众”［大衆の便宜をはかる］、“安定政局”［政局を安定させる］などの“端正”“方便”“安定”などの一部の形容詞の使役用法もこのメトニミーに基づいていると考えられる[14]。同様に、（14b）の場合も、“他作用于车”［彼は車に働きかける］という“致使事件”と“车跑起来”［車が走り出す］という“位移事件”から構成されていて、かつ後者（つまり、事態結果）は事態の駆動力であるという解釈が成り立つ。

以上の考察の通り、V_m と V_d が場所名詞以外に、使役移動構文に用いられる際、一般の名詞と生起することもできる。そのときの動機付けは、メトニミーであると考えられる。

３・３　移動動詞のイディオム化

本節は、例（19）のようなイディオム化した移動動詞の用法を取り上げて検討してみる。

（19）a. 走钢丝
［綱渡りする］
a'. 在钢丝上走
［綱の上を歩く］
b. 下地
［野良仕事に出る］
b'. 下到地上
［地面に下りる］

（丸尾 2005：54）

まず例（19a）の“走钢丝”はイディオム表現として、フレーズ全体が一種の曲芸を表しているが、これは“在钢丝上走”という介詞フレーズと等価ではない。つまり、前者が対応している場面は、後者が表す場面の中の一つに過ぎないのである。では、なぜ“钢丝”は“走”の目的語の位置にくることが許されるのか、その認知的要因は何であろうか。一つ考えられるのは、認知上における“钢丝”と移動物（ここでは言語化されていないが）との関係の変化である。つまり、“在钢丝上走”の場合、二つの参与者である“钢丝”と移動物は、「参照点とターゲット」の関係にあるが、“走钢丝”という限定された場面において、“钢丝”と“走”の関係がさらに強化され、その結果、両者は「トラジェクターとランドマーク」の関係にプロファイル・シフトされている。その傍証として、“钢丝”は介詞構造の中から動目構造の目的語に「繰り上げ」（raising）されているということが挙げられる[15]。

一方、（19b）の“下地”は、ただ“下到地上”のではなく、その後に行う「野良仕事」を指し示しているので、時間的隣接関係に基づく一種のメトニミー表現といえる。その認知的要因は語用論的推論であると考えられる[16]。

以上の議論を踏まえ、移動動詞のイディオム化のプロセスは、次のように示すことができる。一つは、認知主体の捉え方に変化が生じ、それに対応して統語構造が分析性の高い「介詞フレーズ＋V_m」から部分的合成性しかもたない「V_m＋目的語」という動目構造に再構築されるプロセスである。もう一つは、「V_d＋目的語」という統語構造に変化が起きていないが、語用論的推論によって、本来の意味から新たな意味へ転用するプロセスである。

４．おわりに

本稿は、移動動詞とそれが生起する統語フレームの間に生じるズレという言語現象に注目し、この種のズレの現象を説明するために、構文文法の考え方を導入した。そして考察の結果、構文に基づく移動動詞の用法は、とくに「自動移動構文」と「使役移動構文」という二種類の構文の存在と深くかかわっているのが分かった。さらに、それぞれの構文に基づく用法の背後に、人間のもつ様々な認知能力・運用能力が関与していることも明らかにした。今後は、移動動詞以外の動詞と構文の関係についても考察していきたい。

注

1.本稿では日本語訳を［　］で括って表示する。
2.本稿で用いた例文について、出典が明記されていないものは、筆者による作例である。
3.ここでいう「ゆらぎ」とは、一つの動詞が当該動詞の性質に適合する用法と、そうでない用法（本稿では「構文に基づく用法」と呼ぶ）の両方もっていることをいう。とくに、後者の用法に注目する場合、動詞が実際に生起する統語フレームと動詞本来の性質の間にある種のズレが生じているため、この種のゆらぎ現象は、一種のズレ現象ともいえる。
4.中国語と同様、日本語にも同種の言語現象が観察されている。詳しくは李 2001 を参照されたい。
5.ただし、二つの統語形式には意味（ないし語用論）的な

差異が認められる。“她的父亲死了”は出来事に対する一種の客観的な陳述、つまり、中立的な立場であるのに対し、“她死了父亲”は同一真理条件ではあるが、出来事を「損失」のスタンスで評価する話者の主観的な解釈が含まれている。従って、後者の場合は主観化の度合いがより高い。

6. そもそも、この種の言語理論は循環論式論法が用いられているとの指摘がある。詳しくは Goldberg1995、沈家煊 2000 を参照されたい。

7.また、Langacker の認知文法を援用して説明すれば、同一事態概念であっても、認知主体の注目によって言語表現が再構築されることができる。たとえば、

（a）. Line A intersects line B.

（b）. Line B intersects line A.

（a）では、線 A が注目の焦点であるために、主語になっているが、一方（b）では、その注目が、線 A から線 B にプロファイル・シフトされている。同様に、“她死了父亲”という文では、認知主体の注目が、“死”の主体である“父亲”から、損失者である“她”にシフトされ、その結果、統語的に、“父亲”の際立ちの度合いが二番目に下げられ、“她”が「第 1 の焦点」となって主語の位置に現れるのである。

8.本稿でいう「動詞の参与者役割に基づく用法」と「構文に基づく用法」という用語は、ぞれぞれ中村 2004：6 でいう「動詞主導の構文構築」と「認知主導の構文構築」に当たる。

9.さらに言えば、（8a）タイプの“飞”は、「移動様態」を表しているので、“张开翅膀”［翼を広げて］や“嗖的”［ぴゅう］といった様態描写の成分と生起しうるが、「移動手段」を表す（8b）タイプの“飞”は、これらの修飾成分と生起できない（→“*张开翅膀飞日本”、“*嗖的飞日本”）。

10.Langacker1991 によると、同じ認知対象であっても、どの部分をベースにするか、どの部分をプロファイルするか、またはどの範囲に認知スコープを置くかといった認知主体の捉え方によって、異なる概念構造を構築することができる。

11.動詞の「完了」と「非完了」については Langacker1991 を参照。

12.“把”構文の主観性は“竟然”［なんと］という話者の主観的な評価を表す副詞との共起関係からも窺える。

（a）??他竟然划破了手。

（b）他竟然把手划破了。

［彼はなんと手に傷を負った］

13.使役移動構文が表す事態は、“致使事件”と“位移事件”に下位分類する際、話者が“致使事件”を焦点に当てるときは、“把”構文が、“位移事件”に焦点を当てるときは、“被”構文が用いられるという認知的な要因が指摘できる。

14.なお、周红 2005 では、“致使形容词”のこの種の用法は“致使宾语句”と定義されている。

15.“走钢丝”と似たプロセスでイディオム化された言語表現は、ほかに“走后门”、“跑码头”などがある。

16.“下地”と似たプロセスで慣用化された言語表現に、さらに“上厕所”、“下厨房”などがある。

主要参考文献

Goldberg, Adele E.1995. *Construction： A Construction Grammar Approach to Argument Structure.* Chicago: The University of Chicago Press.

Goldberg, Adele E. 1999. *“The Emergency of the Semantics of Argument Structure Constructions,”* in Brian MacWhinney (ed.), pp.197-212.

Lakoff，G．and M．Johnson．1980．*Metaphors we live by.* Chicago: The University of Chicago Press.

Langacker，Ronald W.1991. *Concept, Image, and Symbol: The cognitive Basis of Grammar.* Mouton de Gruyter.

Talmy, Leonard. 1985. *“Lexicalization patterns: Semantic structure in lexical forms ”,* in: Timothy Shopen(ed.), pp．57-149.

深田智 2001.「“Subjectification”とは何か：言語表現の意味の根源を探る」『言語科学論集』(京都大学) No.7, 61-89 頁。

丸尾誠 2005.『現代中国語の空間移動表現に関する研究』, 白帝社。

松本曜 2008.「空間移動の言語表現とその類型」『月刊言語』，Vol.37.No.7，36-43 頁。

中村芳久編 2004.『認知文法論Ⅱ』，大修館書店。

李在鎬 2001.「他動詞文のゆらぎ現象に関する構文的アプローチ」『言語科学論集』（京都大学）No.7，1‐21 頁

山梨正明 2000.『認知言語学原理』，くろしお出版。

沈家煊 2000.〈句式和配价〉,《中国语文》第 4 期，291-297 页。

沈家煊 2002.〈如何处置处置式-论把字句的主观性〉,《中国语文》第 5 期，387-399 页。

周红 2005.《现代汉语致使范畴研究》，复旦大学出版社。

（受理　平成 24 年 3 月 19 日）